

## 鳥の島

～ 'Cause it's Robben island ～

東京都御蔵島村立御蔵島中学校

影山 聡美

### ●概要

期 日：2012年7月30日～8月10日

プロジェクト：南アフリカのペンギン

場 所：南アフリカ共和国

参 加 者：Dr. Peter Barham (team leader), Mario Leshoro (Environmental officer of Robben Island), Barbara Barham (IT Programmer), Kate Robinson (ADU PhD student), Leanne Tol (ADU MSc student), Tammy McElliott (Volunteer, US), Haleigh McElliott (Volunteer, US), Arisa Fujii (Volunteer, Japan), Satomi Kageyama (Volunteer, Japan)

### ●もしかしてできるかも？

思い返してみても、なぜ「いける」と思ってしまったのか自分でも分かりません。葛西臨海水族園から逃げ出したペンギンが気になっていたせいか、オオミズナギドリ調査をおもしろいと思ってしまったからか。

2011年9月、研究者たちのオオミズナギドリ調査の見学をしました。彼らは人里離れた街灯もない真っ暗な道で、オオミズナギドリを捕獲し、計測し、（時には足輪をつけて）放す作業をされていました。私が手伝ったのは発見と捕獲くらいでしたが、鳥の行動を予想し、隠れている場所を探すのはとても楽しく感じました。

一方で、Earthwatch Instituteという団体の活動については以前から知っていました。行くなは今しかありません。



オオミズナギドリ



御蔵島

さて、私の勤める御蔵島中学校は東京都御蔵島村にあります。ここは伊豆諸島の1つで、東京からは200kmほど離れている、人口300人ほどの小さな島です。都内とは違う環境なので、学校や子どもたちの抱える課題は質、量ともに違います。

御蔵島はオオミズナギドリの営巣地であるだけでなく、伊豆諸島固有の野生生物やミナミハンドウイルカが生息しているため、研究者が調査のために来島することも少なくありません。研究成果を住民に還元する機会が設けられていますが、子どもたちにまで浸透して

いるとは言えません。この体験によって、研究と学校の教育活動を繋げることはできないだろうかと考えている、という主旨の論文を書きました。

### ●え！？いいの？

5月、電話で知らせを受けました。第一希望の「南アフリカのペンギン」に採用されたとのこと。しまった！本当に私でいいのだろうか？一緒に行くのはどんな人になるでしょう。きっと私とは校種も性別も違う人に違いない、そう思いました。

さて、期日までに準備をしなくてはなりません。南アフリカ共和国といえば、「アパルトヘイト」と「首都（立法府）はプレトリア」を知っているくらい。プレトリアだって、NHKの番組の歌で知ったくらいですから、知識なんて皆無です。南半球は冬で、星がよく見えるに違いない。ネルソンマンデラが収監されていた島というくらいだから、そりゃあ環境の厳しいところだろう。かつて流刑地だった歴史をもつ伊豆諸島ですから、親近感すら沸いてきました。

### ●解説書を読む

さっそく解説書を読みました。まずは「Potential Hazard」から。

その1 交通。島への移動は船です。船の就航は地域の天候に左右されます。特に冬（6～8月）はリスクが高くなります。船酔いしやすい方は薬を持参してください。

やっぱり！湾からすぐといえども、冬は海が荒れやすいようです。。

その2 動植物。ペンギンの扱いはスタッフが教えます。クチバシで噛むとたいへん危険なので、眼鏡と手袋が必要です。

夜、オオミズナギドリが間違って部屋に飛び込んでしまうことがあります。自力でベランダの柵を越えられない鳥を捕まえて放す時に、彼らにクチバシで突つかれることがあります。あれより痛いなんて！軍手とサングラスでいいのでしょうか。鳥が扱えるようになったら、オオミズナギドリ対策にも役立ちそうです。

その3 天候。野外での活動が中心となります。日焼けと熱中症には気をつけてください。紫外線が強いので、つばの広い帽子やサングラス、十分な飲物などをご用意ください。

8月の天候は、最高気温18℃、最低気温8℃。これは東京三宅島の4月の最高（18.4℃）と3月の最低（8.8℃）とほぼ同じ。1mm以上の降水があった日は月に14日あるのですが、全体の降水量は、三宅島はもちろん東京と比べても格段に少なく、どうやら乾燥しているようです。でも、野外活動に雨具は重要です。雨が多い御蔵島では、山へ行くときの格好はカップに長靴、そしてゴム引きの軍手。海へもこれで行けるので、「フィールドではこれが一番！」とまで言われています。そんな格好で良いのでしょうか。

### ●読めば読む程

それにしても、解説書を読めば読む程、御蔵島とロベン島が似ているような気がしてなりません。客船の就航率が低くて島の出入りが難しい、毒はないが噛まれると痛いヘビがいる、移入種であるネコによる鳥のヒナの減少が心配されているなど。多かれ少なかれ固有の生態系をもつ島では人間の活動とその影響は懸念されるところですが、ペンギンをオオミズナギドリに変えたらそのまま当てはまるのではないかと思う程です。

### ●準備

心配だったのは予防接種です。南アフリカ共和国は緯度も高く冬期ということもあり、深刻な状況ではないようですが、黄熱病、腸チフスといった本の中でしか見たことのない感染症の予防

接種は「通常は不要。ただし、冒険旅行は除く」という表記ばかり。この調査が冒険旅行に当てはまるのかどうか、全く判断ができません。いずれにせよ、御蔵島の診療所では不可能とのことで、専門医に相談した結果、6月に都内でA型肝炎の予防接種を受けることにしました。梅雨前線と台風の影響で海路、空路ともに欠航続きだったこの時に無事に出了るのは本当に幸運。一緒に参加する藤井さんとも会うことができ、心強く感じました。次に島を出るのは出発の時です。

ペンギン研究の入門書はほとんど見あたらないのですが、『ペンギンもクジラも秒速2メートルで泳ぐ』佐藤克文著 光文社文庫、『ペンギンのしらべかた』上田一生著 岩波科学ライブラリー、は手に入れることができました。『巨大翼竜は飛べたのか スケールと行動の動物学』佐藤克文著 平凡社新書などを読み、オオミズナギドリや野外調査について知識を得ました。イルカの調査でケープタウンに滞在していたことのある研究者からも現地情報を教えていただき、期待は膨らむばかり。どんな所で、どんなことをするのでしょうか。

### ●予想を立てて

ロベン島の規模はどれくらいか、住民はいるのか、学校はあるのか。どんな教育をしているのか。知りたいことは続々出てきます。どうせ行くなら予想を立てて確かめたらきっと楽しいはず。そう思い、「ロベン島と御蔵島は似ているだろう」「きっと『島』に共通することがあるに違いない」これを確かめることにしました。



ロベン島行きの船

### ●ロベン島に出発！？

乗り継ぎを含め、東京から約1日半かけてケープタウンに到着しました。空から平らで小さな島が見えます。どうやらあれがロベン島ようです。

プロジェクトの集合場所はロベン島行きの船が発着する港の時計台前。10分前にはもう全員が揃っていました。15時半の船に乗るということで向かいましたが、発着所には学校帰りの小学生と思いき子ども達の姿がありました。ところが、16時を過ぎても乗船の

アナウンスはありません。そういえば、出発時刻の掲示もなければ、係員すら見当たりません。まさか機関故障で欠航か？と妄想が膨らみます。一人だったら絶対心細いに違いありません。乗船が始まったのは小学生どころか中高生、仕事帰りの大人も集まり始めた17時過ぎ。30分の航海でしたが、ロベン島に着いたときは既に真っ暗でした。これがこの日の最終便だったようです。

### ●巣を探せ！

翌日から作業開始です。最初の作業はペンギンコロニーと呼ばれる地域を歩き、巣を探すことでした。位置データの読み方、タグの書き方を教わり、朝露に濡れた茂みや砂浜を歩きます。運良く、抱卵もしくは子育て中で巣に滞在しているペンギンがいた場合は、



ペンギンの作った道を歩く





個体識別用の写真

### ●ヒナを捕まえろ！

次の作業はヒナの計測です。位置データを見ながらヒナのいる巣を探します。白黒は親ペンギンで、ふわふわした灰色がヒナです。警戒する親の攻撃をかわしてヒナを巣から引っ張り出すと、突然のことに驚いたヒナは暴れます。フリッパーで叩くのは序の口。膝の間に置き、両膝で挟めば大丈夫です。頭が自由になるとクチバシで突ついてくるので、片手で後ろから頭骨を押さえ、もう片方の手でクチバシを閉じればもう身動きは取れません。おとなしくしている間に頭長を測り、記録します。次は体重。バッグに入れて吊るして測ります。この時に暴れて最終手段に出るのです。それはフン。じたばたしているヒナを持ち上げると、ジャーンとかけられます。こんなことでも、度重なると汚れることに抵抗を感じなくなります。カップを着ていて良かったと思う瞬間でした。



子育て中のペンギン

データベースの写真と見比べて過去にいたものと同じであるか確認します。識別は胸の模様の違いによって行われます。よく見ると、斑点や太さが個体によって全く違います。新しい巣や個体を発見したら写真を撮り、リストに加えます。家に戻ってからはそのデータを入力し、リストを更新しました。



巣のタグ

### ●ロベン島だもの

2日目の夜、夕食の準備が終わった頃、突然電気が消えました。窓から集落を見下ろすと、どの家も真っ暗。どうやら島中が停電しているようです。大きな貝殻にろうソクを立てて、テーブルや暖炉の上など、部屋のあちこちに置きました。一瞬点いてはまた消える、その繰り返しです。その度に一喜一憂するメンバー

たち。でも、学生Kateの一言「仕方ないよね。ロベン島だもの」に「確かに」と納得してしまいました。それにしても、部屋に暖房などあるはずもなく、陽が傾き始めてからは冷え込む一方です。こうなれば寝るより他ありません。このような日が2日続きました。





海岸に張られたテント

### ●張り込み

庭で洗濯物を取り込んでいると、リーダーのPeterがテントを組み立て始めました。黒地に葉の絵が描かれた不思議な柄のテントです。聞くと夕方からこれを持って出かけるとのこと。これに隠れてペンギンを待つのだとか。本気なの？と半信半疑でついていきました。車から降りてテントを張るよう指示された場所はビーチと林の境目。笑いを堪えつつ、テントを組み立て、椅子と望遠鏡を設置し、携帯を渡されて観察開始です。海から帰って来たペンギンたちの中に識別用のバンドをつけたものを探し、その番号と行動を記録しま

す。バンドペンギンは、全体ではほんのわずかしらないので、我々にできるのはひたすら待つこと。2時間ほどの間に次々と上陸していくペンギンたちですが、バンド装着を確認できたものは5羽。そのうち2羽は番号を読む前に見失い、記録できたのは3羽だけでした。腹部がピンクに染まっていた個体も見付けましたが、これらは事故等で保護された後に放された個体で、2週間くらいしたら消えるとのことでした。



バンドペンギンを探せ！

迎えの車が来たのでテントを畳んで片付けようとしてしました。が、うまく小さくなりません。さっき庭で手伝ったときはできたのに！と大騒ぎしてようやく袋に収めて振り返ると、数メートル後ろの岩の上で上陸を待っていたペンギンたちがこちらの様子を窺っていました。本末転倒とはまさにこのことではありませんか。

### ●アラーム鳥

2日目の朝、夜明け前からプププというアラームの音が聞こえました。その日の昼の作業中、ビーチで似たような音を聞きました。「今朝、この音しなかった？アラームだと思ってた」と学生Leanneに尋ねました。彼女の指差す先には白と黒の鳥が飛んでいました。鳥？！しかし翌朝以降、その声を聞くことはなく、次に耳にしたのは日曜日の早朝。鳴く時と鳴かない時の違いは何？思い当たるのは1つ、そういえばどちらも夜明け前に雨が降っていました。これはきっと雨宿りをしている鳥が鳴いているに違いない。そう思っていたら、その晩、雨が降り出した時に聞こえました。やっぱり！

「これって何て鳥？雨の時に鳴くでしょう？」そうKateに尋ねると、「カエルよ。Sand Rain Frog. 可愛い」と。「カエル？鳥じゃなくて？」とても可愛らしい鳴き声です。信じられない私にADU（ケープタウン大学生物統計学研究室）が作成した『ロベン島の野生動物』という小冊子を見せて、教えてくれました。確かに可愛らしい。それにしても、カエルだったとは。いつか姿を見たいものです。

## ●ロガーペンギン

学生たちが取り組んでいる研究についても教えてもらいました。ヒナのいる親ペンギンにロガーを着けて、彼らの採餌行動を記録し、ヒナの成長具合と親の行動の関係を調べているそうです。親ペンギンは一日おきに交代で海へ行き、魚を捕まえてきます。親ペンギンはひもにくくりつけて持ち上げて計測します。4キロ近くあり、非常に重く感じます。



ペンギンからロガーを外す

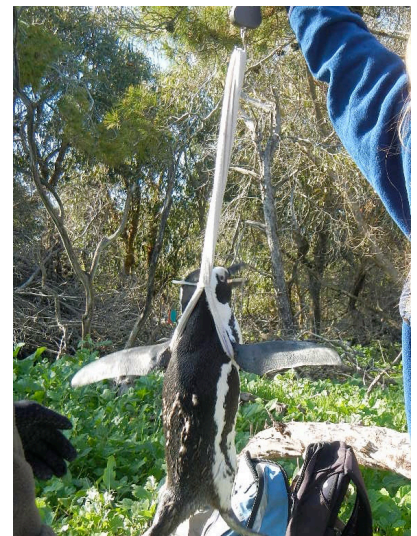
から来ているときは貴重な機会です。夜遅くまでディスカッションしている姿が印象的でした。

彼女たちは繁殖期（3～9月）のほとんどはロベン島に滞在してデータを集めています。2人はADU

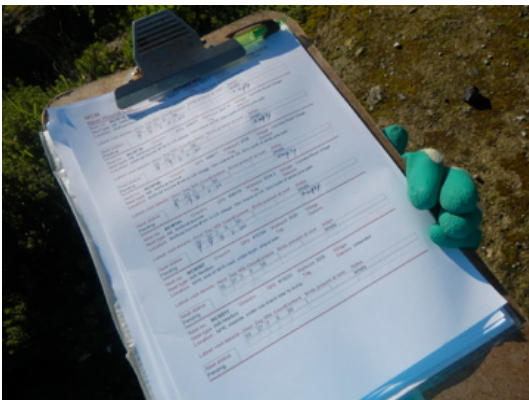
（ケープタウン大学生物統計学研究室）の修士課程と博士課程に属している学生です。どちらもカナダの大学を卒業し、ペンギンの研究がしたくてケープタウンに来たということです。直接の研究の指導者はケープタウン大学にいますが、共同研究者のPeterがイギリス

## ●アフリカーンス

巣のチェックをする時に書かせないのはGPSの値と言葉による位置情報。これがなかなか難しく、まるでオリエンテーリングのようです。例えば「ビーチの端から30m。2つ目のアイスクリームスタンドの柱から西に5m入ったところ。倒れたマツの下」といった具合です。最初のうちは、単語が分からずに「これは何？」と聞いたものですが、慣れてくると日本語に訳さなくても分かるようになりました。例えば、clearingは林から抜け、視界



ひもで吊るして計測する



巣のリスト

の開けたところ、日本語で表すならば「広場」とか「空き地」といったところでしょうか。アフリカーンスの混じった英語でした。

更に、ペンギンが好んで巣を作るのはたいてい同じ植物の下だということが分かってきました。それはrooikransとtetragonia。和名は知りませんが、よく見かける植物です。新しいものの名前を「覚える」のではなく、他から切り離して世界を認識していくなんて、いつ以来でしょうか。久しぶりの経験に嬉しくなり、Peterに聞いてみました。

「この木がrooikransでしょ？ どういう意味なの？」





rooikurans（右）の下に集まるペンギン

「その通り。アフリカンスでrooiが赤い、kranが実という意味。赤い実になるんだよ。」

探してみましたが、残念ながら冬の終わりなので、マメのサヤのようなものがついているだけで、実は分かりませんでした。rooiといえば…？ruooibos！南アフリカのお茶でルイボスティーというものがあるではありませんか。ルーイボス、ルーイボスとブツブツ言っていたら閃きました。

「bush！！！」

「正解！」

rooibosは赤い低木。きっと、ガイドブックに載っているような常識なのでしょう。しかし私にとっては大発見。こうやって獲得したものは、簡単には忘れません。

### ●ペンギンを救え！

ホワイトボードに書かれた残りの作業も少なくなってきました。今日の課題は浜清掃。釣り糸に絡まってしまう海鳥が多いとのこと。袋を持って歩くと、目につくのはプラスチック。浮きや洗剤や飲物のボトル、中には日本製の商品もありました。ペンギンに見られたりしながら進んでいたら、とんでもないものを発見してしまいました。なんと、ペンギンです。しかもバンドを着けた個体。荒い息をしています。集まってきたメンバーと相談し、電話で助けを呼び、応援を待つことにしました。



倒れていたペンギン

Peterが持ってきたのは昨日私たちが組み立てた箱。これに入れて家まで運び、応急処置をしました。腹部の羽毛に血がついています。翌日の船に載せようとしていましたが、残念なことに夕方

亡くなってしまいました。ケープタウンにあるSANCOOB（南アフリカ沿岸性鳥類保全基金）本部に送って死因を調べてもらおうそうです。SANCOOBはペンギンだけでなく、様々な海鳥の救助や保護をしている団体です。2000年のトレジャー号原油流出事故で被害に遭ったペンギンの保護やりハビリを行ったそうです。ピンクのマーカーもこの団体のものとか。ケープタウン市内やボルダーズビーチ（ケープペンギンの営巣地として観光の名所になっている）では募金箱を見かけました。



輸送用の箱 ペンギン2羽まで収容可能





スーパーに置かれた募金箱

### ●余暇は

土曜と日曜は完全に休日です。作業はありません。週末をケープタウンで過ごすこともできると聞いたのですが、空き時間にはぜひとも島を見たいと思っていたので、週末は島を出ないことにしました。

1人で外にいと、すれ違う人には必ず声をかけられます。「何してるんだ?」「どこから来たんだ?」「どこに滞在してるんだ?」といった具合です。「港まで行くなら乗せていこうか?」とも。観光客ではなく、他所から来た人というのは珍しく、興味津々といった様子です。東洋人はほとんどいないのでしょう。繁殖シーズンの数か月に渡って滞在している学生さんたちは顔を覚えられているようでした。しかし、島の人たちはペンギンには興味がないようで、「ああ、ペンギンね」とそっけない反応です。雨の日に参加したロベン島の刑務所見学ツアーでも島内にペンギンのコロニーがあることは触れられませんでした。いたら当たり前になってしまうものなのですね。これは分かる気がします。



診療所と救急車

### ●村の様子

刑務所跡地から100メートルほど歩くと、すぐに村の中心地です。様子を知るのに外せないのは診療所と郵便局、それから学校です。救急車を運転していたのは看護師さん。郵便局も同じ通りにありました。開いているのは平日のみ。ランチタイムの2時間は必ず閉まります。6ランド(約60円)で日本にハガキを送ることができました。ちょうど1週間で東京、御蔵島まで届きました。

島に1つだけ、小学校があったが、昨年廃校になったと聞きました。廃校時の児童数は5学年で14人。教師は2人しか配置されておらず、運営的にも厳しかったのでしょう。今は毎朝船でケープタウンまで通っているそうです。夕方には、かつて校庭だった広場でボール遊びをする少年たちの姿を見かけました。

また、島で出されたゴミは全て島の外に運ばれているそうです。ゴミを村外れの集積場まで出しにいきましたが、周囲は割れた瓶や缶が散乱し、あまりいい環境とは言えませんでした。裏庭の穴に投げ込んだ生ゴミをクジャクやリクガメが食べに来ていました。



小学校跡

## ●野生生物

張り込みをしない夕方はスプリングボックやダマジカ、ノウサギやホロホロチョウを数えるゲームカウントに行きました。林の中にはエランドの全身の骨がそのまま残されていました。これらの哺乳類は食料用にとヨーロッパから連れてこられたものばかり。本来は存在しないはずの移入種です。カウントすることで全体数を把握しているようですが、数はどんどん減少しており、特に対策は練られていないようです。問題となっているネコは1匹も見ることができませんでした。また、湾を通るニタリクジラやコシャチイルカを陸上から観察できましたが、ビーチにはクジラの首や腰の骨だけでなく、座礁したミナミセミクジラの死体まるごと1頭も見つけてしまいました。大西洋に面した島の西側には朽ちかけた座礁船が放置されているなど、海流の厳しさを感じました。



ミナミセミクジラの死体

ず、もどかしい思いをしました。

日本に戻ってから、和名（アフリカクロトキ）を知り、トキ亜科の鳥であることが分かりました。日本にいるトキの形や英名（Crested Ibis）を知っていたら、もっと楽しめたかもしれません。ウヤバンに似た鳥も見かけたのですが、小型の和英／英和辞書には載っておらず、自然科学の知識があれば、と悔しく感じました。普段いかにインターネットに頼っているかを認識しました。



アフリカクロトキ

## ●手作り

滞在中にPeterとBarbaraの40回目の結婚記念日がありました。みんなでカードを書き、事務連絡用のホワイトボードにペンギンの絵を描いてお祝いをしました。テーブルの上には紙で包み、鳥の羽で飾ったプレゼント。中身はなんと、手描きの絵や好物のクッキー、ペンギンのブローチでした。物がなくても、お金をかけなくても、お祝いはできます。夜は暖炉を囲んでシャンパンで乾杯。私も便乗して、ちょっとした演奏会をやりました。メンバーのみんなが楽しんでくれて、ほっと一安心。手作りの良さを感じた一日でした。

## ●楽しさは同じ

夕飯の後、暖炉の前でLeanneと話をしました。無口な彼女とは一言二言のやりとりくらいしかしていませんでしたが、なんと、カナダの小さな島から来たことが分かり、「島ってこういうことあるよね」「あるある！」なんて盛り上がったのです。そして、「留学反対されなかった？」「研究は楽しい？」という話も。自分も含め、この調査に関わった人は物質的に豊かでも安全でもな



い環境なのにとっても楽しそうで、ペンギン、そして研究が好きなのだということがよく分かりました。普段から不思議に思っていた、御蔵島に調査に来る研究者や学生たちのことも腑に落ちました。こういう調査研究がすぐに地元に還元されることは少ないかもしれないけれど、子どもに伝える価値は十分にある、強く感じました。

### ●これぞまさに！？

活動も残すところあと2日。明日は移動日なので、実質の島での生活は今日でおしまいという朝のことです。テーブルではKateがパソコンを見ながら叫んでいました。昨日回収したロガーに不具合でもあったのでしょうか。「夕方『張り込みをやりたい』ってお願いしてみようかな」なんて思いつつ、庭で日の出を眺めていると、Peterがやってきました。天気のことでは話があると。

「予報によると、明日から海が荒れるようなんだ。明日は朝の船なら来る可能性があるから、それに乗ることもできる。でも、もし欠航したら次は日曜か月曜か、いつ来るか分からない。日本に帰る飛行機に乗れなくなってしまうかもしれない。プログラムを終えて、今日の船でメインランドに帰ることができるが、どうする？」

「今日はこんなに穏やかなのに。いつから悪くなるの？」

「明日の午後からかな。北西の風が強くなると、船は欠航する。観光ツアーも全てキャンセルになるんだ」

「なるほど。返事はいつまで待ってもらえる？すぐ？」

「Marioに切符の手配を頼むから、彼が来るまでだ。申し訳ない。」

「大丈夫。だってロベン島だもん。」

「船が着かないかもしれないから早く帰れ」だなんて。これはもう、今日中に島を出るしかないでしょう。離島に共通するかどうかは知りませんが、御蔵島には『来たものに乗る』という話があります。島を出たいときは乗れるもの（船や予約を取れているヘリ）が来たときに乗ってしまうのです。例えば、東京まで行きたいが上り便（東京行き）の就航が危ぶまれる場合は下り便

（八丈島行き）に乗ってしまいます。八丈島で下船せず、そのまま折り返して東京へ向かうと、御蔵島から直接東京へ向かう場合と比べて7時間、距離にして約150キロが加わります。しかも下り便は朝6時に入出港するので早起きしなくてはなりません。それでも島を出たいから来たものに乗るのです。船が来なければ本当に出られませんから。昼の船を待たずに午前中のヘリに乗ったり、午後のヘリの予約を取っていても、昼の船が着いたら乗ることなどはよくあります。御蔵島に住んで2年が経ち、『来たものに乗る』にも慣れてきましたが、その教えを引っ張り出すとは！さすがロベン島。期待を裏切りません。

### ●見送られて

14時頃出港する船に乗るべく、港へ。正確な時間を誰も言い当てられないという状況ですが、別にそれほど困らないといういい加減さです。港でのセキュリティチェックは、スーツケースを開けて確認してもらいました。もちろん、ロベン島からは動植物の持ち出しは禁止されています。「世界遺産だからね」というのがチームでも良く言われていました。ツアー客に自由行動をさせないのもこういった理由があるのかもしれませんが。



ロベン島を出る



ツアー客に混じってスーツケースを抱えて乗船しました。そういえば、「行ってきます」ではなくて「さようなら」と島を離れるのは初めてです。手を振りつつ、自分が島の学校から異動するときのことが頭をよぎりました。それはきっとそう遠くない将来です。



テーブルマウンテンからロベン島を見る

ケープタウンに着いてから、天気の良いうちにとテーブルマウンテンに登りました。狭くて刺激の少ないところから出てきたはずなのに、目はどうしてもさっきまでいたロベン島を探してしまいます。不思議なものです。こんな面白いところがあつて、あんな面白い人たちがいて、その事実を知ってるだけで、心が豊かになれる気がします。

### ●嵐はやってきた

さて、思いがけず一日早く帰ることになりましたが、翌日は予報通り北西の風の影響が出てきて、海ツアーのいくつかは中止になりました。もちろんロベン島行きのツアーも全便欠航です。南東に70キロ離れたハマナスは風の影響もなく、凪いでいたので生きたミナミセミクジラを見ることができました。

その夜から暴風雨となりました。窓を閉めていても雨風と何かが飛ばされていく音が聞こえるほどです。ガイドさんによると、この嵐が過ぎると春本番になるとのこと。外に置かれた金属製のテーブルが風で動かされ、歩行者の傘が逆向きになるのを見て、「傘ではなくてカッパ！」ではなく、「昨日のうちに島を出ていて本当に良かった」と実感しました。



やはり欠航

### ●だって島だもの

予想をはるかに越える共通点を見いだせたロベン島と御蔵島。約15000キロ離れていても島は島！人より野生動物の方が多くても、物はなくても、インフラが怪しくても、交通が不便でも、人の考えや活動に違いはありません。

この体験を御蔵島中学校で生かすにはどうしたらよいのでしょうか。授業や集会で話すだけでは勿体ない。総合の地域理解学習を利用して、御蔵島での調査活動を体験させていただくのはどうでしょうか。研究の話聞くだけでも得るものはあるはずです。ほんのわずか



チーム6のメンバー

でも経験すると意識は変わってきます。珍しいかどうかだけでなく、生態にも目を向け、その生物の面白さを深めるようにしていきたいと思います。せつかく、面白い島に住み、離れているのにとっても良く似た島とそこに集まった人たちを知ったのですから。